特集1｜続・生き続ける建築

4

安井武雄

Takeo Yasui

1884年、千葉県佐倉に生まれた安井武雄は、東京帝国大学工科大学建築学科に学んだ。
学生時代から様式スタイルに従うことを否定し、卒業設計では木造住宅を選んでいる。
そこでは和洋の境界を外して共生させ、安井独自の考え方を提唱し、周囲を驚かせたという。
卒業後、南満州鉄道に入社し、10年間を中国大陸で過ごした。
日本建築界への橋渡しになることを意識しながら大陸的なダイナミズムと優しさ、過去と近代、和と洋の一体化…、
この感性を研ぎ澄まし、設計に邁進した。
その後、大阪の片岡建築事務所に転じ、1924年に安井武雄建築事務所を開設する。
実業家・野村徳七らの支援を得て、エキゾチックな様式、アール・デコ風の近代性を
巧みにバランスさせた独自の作風を展開し、多くの作品を世に送った。
今号は、日本の近代建築でも屈指とされる作品を通して、
独自で多様なスタイルを示しながら時代をリードした安井武雄の生涯を振り返る。

出典：『自由様式への道―建築家安井武雄伝』

高麗橋野村ビル 新築設計図詳細図※（部分）

自由を求め続けた不羈（ふき）の精神

石田潤一郎 | Jun'ichiro Ishida

1.開きつつ閉ざす――大阪倶楽部

大正8年[1919]、安井武雄は南満洲鉄道建築課技師を辞して、大阪の片岡建築事務所に入所した[1]。この年、第一次大戦によって巻き起こった好景気は頂点を迎え、大阪の地価は前年に比べて3倍にも上昇する。西日本最大の建築事務所である片岡建築事務所はオフィスビルの設計に追われていた。

その9年前、明治43年[1910]の春、安井は東京帝国大学建築学科の卒業設計で木造住宅を主題とした。「他人の真似をするのが絶対に嫌いで何とかして自分自身のものを出そうとする努力と野心に満ちていた」[2]安井にとっては、その決断は、是非を問わないものだったのだろう。だが、今日でも卒計で個人住宅をテーマとすることははばかられるものがある。この時期の帝国大学では、レンガ造の大規模建築をこなせる能力を示すことが求められたから、彼の卒業設計「住宅設計製図」は教官陣の不興を著しく買うこととなる。卒業時、安井の席次は14人中3位という好成績だったと見られるが、卒業設計が祟って、満鉄という創設後日の浅い“外地”の国策会社に就職することを余儀なくされる。だが、結果的には、そのことで彼の満々たる覇気は矯められることを免れた。

帰朝当時の安井は35歳、満洲で幾つもの作品を任されていたとはいえ、まだ模索の時期であって、その個性を十全に完成させていたわけではなかった。その意味で、“安井武雄が安井武雄になった”決定的な作品といえるのが「大阪倶楽部」[1924]である。その意匠は「南欧風の様式に東洋風の手法を加味せるもの」と説明される。たしかにイタリア・ルネサンス初期の邸館を基調としており、そこに展開する装飾は、インド・サラセン風であったり、中国的であったりする。しかし、全体から受ける印象は「南欧風」という言葉の向日性から遠く、装飾の布置にしても「加味」といった微温性とはかけ離れている。福田晴虔氏が「沈痛な北方遊牧民的感覚」と呼んだ[3]、言いしれぬ暗さ――暗いというのが否定的ニュアンスを伴うとすれば、奥深さと言い直そうか――を感じずにはおれない。そういった印象を発生させる源のひとつは、正面の構成である。その1階には5連のアーチが並ぶ。それはまさに南欧のアーケイドの直喩である。だがアーチのうち、本当に出入りできるのは中央玄関の1ヵ所にすぎず、あとはくぼめられるだけで奥は壁でふさがれる。さらに前面に立つ4本の独立柱。この柱は満洲風とも称される不可思議な意匠ばかりが注目されるが、これが立つことによって生み出される仮想のスクリーン性にも目を向けるべきだろう。つまり、この建築物の立面は、内部空間に到達するまでに幾層ものバリアーを仕掛けているのであって、そのことが、理解されることを拒んでいるような晦渋さを建築に賦与していると見なせるのである。

「開いているようで閉じている」、「つながっているのに遮られている」、こうしたファサードの特色は内部においても展開されていく。球戯室と談話室を区切る柱列と床レベルの差、あるいは3階小食堂を横断する柱列など、大空間の中に、視野を遮る要素が導入されている。また鉄筋コンクリート構造の梁成とハンチがことさらに強調されて、分節感を強めている。これらの累層によって、この建築はその単純な平面とは裏腹の迷宮性を獲得しているといえる。

上――**大連税関長官舎**※｜満鉄に在籍した10年間に安井武雄が担当した作品は6件が知られている。大連税関長官舎は建築家・安井武雄の第一作となるもので、1911年に竣工した。大連にはロシア統治時代に多くのアール・ヌーヴォー建築が建てられており、この作品の反りのついた屋根も、東洋趣味というより世紀末的造形の影響を見るべきかもしれない

下――**南満州鉄道中央試験所**｜1915年の竣工。現在知られている範囲では満鉄時代最後の作品。破風の反転曲線や屋根窓の配置などにフリッツ・シューマッハーなど北ドイツのユーゲント・シュティールの影響がうかがえる

［出典：『自由様式への道―建築家安井武雄伝』］

大阪倶楽部

上――**球戯室**：1階の中央を談話室兼囲碁室が占めるが、その奥に半階下がって球戯室が置かれる。この2室は連続しながらも、レベル差と連続アーチによって分節される

下――**3階小食堂（現・会議室）**：室内を横断する柱列は普通、できるだけ目立たせないように努める。だが、ここではむしろ強調され、室内構成における重要なアクセントとなっている

2.抽象性への転身――2つの野村ビル

安井武雄は片岡建築事務所の所員として「野村銀行本店」[1924]と「堂島支店」[1922]の設計を担当し、それを通して、野村徳七の信頼を得ていた。大正13年[1924]4月、安井は片岡建築事務所から独立するが、その後も野村徳七は安井武雄建築事務所最良のクライアントとなる。「野

1――安井武雄の事績とその位置づけについては、『自由様式への道―建築家安井武雄伝』（山口廣 著［南洋堂/1984］）に多くを負っている
2――長谷部鋭吉「安井君」『建築と社会』1955.8/p.51
3――福田晴虔「安井武雄―近代日本、建築家の足跡10」『建築文化』1990.12/p.135

野村銀行京都支店｜四条通りに異彩を放っていた。柱型の形態の奇妙さにとどまらず、その間のアーチは放物線をなし、迫縁は傾斜がつくといったように、造形は奔放を極める［出典:『自由様式への道―建築家安井武雄伝』］

高麗橋野村ビル※｜奥行きが浅く、高麗橋筋に沿った衝立のように見える。量塊的な材質感とのずれがこの建築を一層印象深いものにしている。現在は7層目が増築されている

安井武雄自邸※
上――**外観**:西宮市夙川の北向き斜面に建つ。一見、3階建てに見えるが、最下階は地階の扱いで、ここだけが鉄筋コンクリート構造、上2層は木造であった。阪神淡路大地震後、撤去されたのが返す返すも惜しまれる
下――**1階応接室**:右側の細かなタイル張りの部分は暖炉。その端部に突き出た袖壁や壁面の凹凸のつけ方に興味深い

4――川村種三郎「安井先生追想」『建築と社会』1955.8／p.54
5――安井武雄「希臘古典芸術に関する一考察」『柊』第1号.1923.6

村銀行京都支店」[1926]は極端に窓の少ない立方体の骨格と、そこに並ぶマヤ風の装飾を持ったピラスター(付け柱)、階段状の天井など、安井の独創性が最も直截に表れた建築といってよい。ただ、早くに失われており、ここではその圧倒的な異形ぶりを指摘するにとどめたい。

「野村證券本社」[1926]を経て、昭和2年[1927]に「高麗橋野村ビル」が出現する。この建築の骨格はごくありふれた箱形のオフィスビルなのだが、各階の間を巡るスパンドレルがオーバーハングして巡らされ、その上端は大ぶりな瓦で縁取られる。さらにその壁体はモルタル掻き落としと陶板によって仕上げられる。その土俗性と東洋性は、四合院の並ぶ中国都市の街路を垂直に立ち上げたといった感覚を与える。言い換えれば、細部がオフィスビルという全体像をかき消して不思議な構築物として立ち現せているのである。ちなみに、安井は、原寸図を所員任せにせず、自ら描く珍しい建築家として知られた。

続いて「日本橋野村ビル」[1930]を設計する。高麗橋と日本橋の両野村ビルを比べると、壁面を仕上げる材料はともにタイルとテラコッタ、1階まわりは石と特段の変化はない。もとより建築物の性格も執務室中心のオフィスビルであることは同じである。ただ、受ける印象は画然と異なる。日本橋野村ビルでは曲面が控えられて、直交座標にすべてが載っている。テクスチュアも、最上階の白モルタルに現れているように、平滑で淡泊な材料が選ばれている。限りなく似ていて、しかしはっきりと原理的なところから違っているのである。

「同じ手法の繰り返しや取扱を避ける」というのが安井の信条だったと、片岡建築事務所時代から安井を助けてきた川村種三郎は回想している[4]。設計期間が2年は離れているのだから、違っていてむしろ当然といえるかもしれない。だが、彼の活動を注意深く辿ると、非連続な変化への道筋がうっすらと見えてくる。

大正12年[1923]、安井は「希臘古典芸術に関する一考察」を発表する[5]。内容は「亜米利加の一芸術家ヂエーヘンブリツヂ氏」の比例理論の紹介である。現在ではジェイ・ハンビッジと表記される美学理論家は古代芸術の造形の中にルート矩形として説明できる比例関係を発見した。安井のこの小論は、今や広く知られるこの理論ダイナミック・シンメトリーの重要性を日本で最初に指摘したものである。このことは、この時点で安井が造形の抽象的な比例関係を重視していたことを如実に示すだろう。

一方、1920年代後半に入って設計した作品には、水平のラインの繰り返し、また、ボックスの角を回り込む窓などがしきりと現れる。そこにはフランク・ロイド・ライトからの示唆を見ないわけにはいかない。なかでも昭和2年[1927]に「住宅に関する展覧会」に出品された「私の家」は、ライトの作風への関心が直截に表れている。ライトの幾何学性やその空間構成に触れたことも安井の跳躍のばねとなったのではないか。

安井の関心は、形態の抽象性からさらに空間の抽象性へと広がる。すなわち、(ヘンリー・ラッセル・)ヒッチコックと(フィリップ・)ジョンソンが『インターナショナル・スタイル』で提示した「ヴォリュームとしての空間」の追求である。昭和4年[1929]の「関川貞雄邸」、昭和5年[1930]年「熊本石造邸」でその萌芽が見えたが、昭和6年[1931]の自邸に至って、ヴォリュームの開示が設計の主題となる。そこでは、無装飾の白いボックスを相互に貫入させ、欠き取り、ずらすという操作が徹底的に行われている。ただ、平面を見ると、主要な室ではL字形・T字形をなしている。この処理には、大阪倶楽部での視線の遮断と同質のねらい、すなわち空間の不均質さを生み出そうとする意志を感じるのであって、この建築がデ・ステイル的な抽象形態の構成のみを目指すものではなかったことを伺わせる。

――

3.人間のための自由様式――大阪ガスビル

――

ちょうどこの転換の時期、すなわち昭和4年5月、安井武雄は大阪ガスの本社ビルの設計依頼を受け、翌5年4月に着工、8年[1933]3月竣工へ導く。「大阪ガスビル」は、完成した時から絶賛され、今に至るまで、その評価は揺るがない。白と黒の明快なコントラスト、同形の窓の繰り返しとそこを水平に分節する薄い庇、曲面の隅角部を回り込む大きなガラス。当時「簡素明快新時代の感覚に富む」と評されたように[6]、モダニズムの語法を駆使している。このデザインについて、安井は「使用目的および構造に基づく自由様式」と説明する。この言葉は、彼の合理主義的設計姿勢を宣言したものといってよい。

ただ、福田晴虔氏・酒井一光氏がそれぞれに指摘するとおり[7]、大阪ガスビルには一般的な「モダニズム建築」の枠に収まらない部分が存在する。合理主義では説明しきれない要素といってもよいだろう。特に注目したいのは、外周に沿った柱筋の処理である。外壁面を分節する柱は実は2本に1本はエアーダクトを納めるピラスターであり、2階のキャンティレバー部分まで(つまり室内にまで)このダミーの柱が立つ。なお、このピラスターの断面形は放物線形をなす。それが"柔らかさ"を生んでいることは池原義郎氏が指摘するところである[8]。ここまでたびたび指摘してきた空間のかげりやよどみを求める志向は、「簡素明快」な建築の中になお伏流しているというべきであろう。

大阪ガスビルの達成のその先へ、安井はさらに進もうとした。「旧山口吉郎兵衛邸」(現・滴翠美術館)[1933]、「南満州鉄道株式会社東京支社」[1936]、「(日本競馬会)京都競馬場」[1939]などでそれぞれに創意を見せたが、戦時体制化によって逼塞(ひっそく)を余儀なくされる。軍人の子弟でありながら軍人をひどく嫌った安井は、戦時下にあっては唯一の仕事の機会であった軍事施設に手を染めようとしなかった。このため彼は戦中から戦後にかけて辛酸をなめることとなった。1950年代に入って、「大和紡績本社」[1952]、「日綿実業本社ビル」[1953]などで、ようやくその手腕を振るえるようになったが、その途上で世を去る。

安井の著述は少なく、その少数の言説も分かりにくいところが常に残る。たとえばこういう文章がある――「私は現在の混沌なる状態を、やがて来る可き新秩序の胚子が発芽を待って居ると見たいのである。…今や吾々は其の胚子の発芽の為によき沃土を以て培わなければならない。其よき沃土こそは我々の全生活の衝動と万有の法則と而して人間の本能であるべきだ」[9]。あるいは「我等は自然の一胞子であり、而して自然の連鎖である。…我々は自然の中に終始すべきである」[10]。また「私は徹頭徹尾、様式といふものに対して反抗した、而して現実に触れたい一心を続けてきた」[11]。

「本能」や「自然」、「現実」という言葉が、具体的に何を意味するか、その先を安井は書いていない。しかし、安井作品の壁面のざらつきに手を当て、広間の隅のかげりに目を凝らしていると、無機物の集積であるはずの建築が、静かに息づいている獣のように感じられてくる。

「様式」は人間と空間・形象との関係を整序することによって成立し、洗練される。安井は、しかし、そうした定式化を拒否した。彼が「本能」や「全生活の衝動」といった言葉で語ろうとしたのは、縛られることのない人間の行為の広がりであっただろう。そうした「自然」としての人間を受け止めて、うごめき出す建築を彼は生み出した。彼は、歴史様式だけでなく、モダニズムの語法の硬直性をも、反抗すべき「様式」として見ていたはずである。「使用目的及び構造に基づく自由様式」という彼の自註を、「簡素明快」なモダニズムの建築観と受け取っては半面だけの理解である。むしろ合理性の先に立ち現われた建築と人間の胸騒ぎするような交感にこそ、安井武雄の達成を見るべきだろう。

いしだ・じゅんいちろう――京都工芸繊維大学教授／1952年生まれ。京都大学建築学科卒業。同大学大学院博士課程修了。工学博士。
滋賀県立大学環境科学部助教授を経て、2001年から現職。専攻は日本近代建築史。
主な著書:『日本の建築 明治大正昭和7 ブルジョワジーの装飾』［三省堂／1980］、『屋根のはなし』［鹿島出版会／1990］、『都道府県庁舎―その建築史的考察』［思文閣出版／1993］、『関西の近代建築 ウォートルスから村野藤吾まで』［中央公論美術出版／1996］、『近代建築史』［共編著、昭和堂／1998］、『湖国のモダン建築』［共著、京都新聞出版センター／2009］など。

上――**旧山口吉郎兵衛邸(現・滴翠美術館)**※｜芦屋市に所在。戦後は滴翠美術館となった(建物内部は、美術館展観中の展示室を除き、非公開)。南を正面として、東側にL型の洋館、西側に木造平屋の和館が並立する。2階部分に旧宅の座敷を内包するなど建築主の複雑な希望も容れつつ、卒業設計以来の伝統住宅の再解釈を果たす
中――**南満州鉄道株式会社東京支社**※｜黒御影・白御影・クリーム色タイルの3種類の外装材によって壁面を分節する。その硬質な表情からは、大阪ガスビルからさらに新しいファサード表現に踏み出したことがうかがえる
下――**日本競馬会京都競馬場**※｜戦前期最後の大建築。コンペによって獲得した。鉄骨構造による23mに及ぶ片持ち梁とそこから吊り下げられた特別観覧席の緊迫感は、近代日本の構造表現の中でも特筆に値する

6――「大阪瓦斯ビルディング」『建築と社会』1993.7／p.7
7――福田前掲／p.138。酒井一光「成熟のモダニズム 関西のモダニズム建築第12回」『まちなみ』2001.12／p.13
8――池原義郎「和洋の共生を超えて独自の自由様式へ」『INAX REPORT』No.96.1991.10／p.5
9――安井武雄「昭和四年の建築界を顧て」『建築と社会』1930.1／p.14
10――安井武雄「偶録」『建築知識』1936.1／p.38
11――安井武雄「踏んできた道」『建築知識』1937.1／p.29

大阪倶楽部

竣工年:1924年

所在地:大阪府大阪市中央区今橋4-4-11 | 規模:地下1階、地上4階 | 構造:RC造
国登録有形文化財

2

3

4

5

6

1——南面正面外観詳細:半円アーチの曲率が異なっているのは初期イタリアルネサンス建築の特徴だが、そうした様式的講釈とは無縁な造形である。声低い語りかけに耳を澄ませば、晦渋さの魅力はきっと伝わってくる
2——1階広間:パティオにあるべき泉盤が、玄関を入るといきなり出現する。水を吐き出す鬼面も脈絡が分からない。一方、黒と白の市松模様の床は、この擬古性と対照的で、後年の安井武雄を予感させる
3——4階大食堂(現・ホール):細かいピッチで配された梁が強い奥行き感を生む。当初は浮き彫りがもう少し浮き立って、今よりは華やかな印象だったはずだ
4——3階小食堂(現・会議室)の持ち送り:垂下する円花飾りは、いわゆるインド・サラセン風のモチーフを導入した早い例。ほぼ並行して武田五一が用いている(京都大学本部本館、京都市庁舎など)。以後、大阪市交通局庁舎[1930]、宮崎県庁舎[1931]など、安井や武田に近い建築家間で一種の流行が起きる
5——3階談話室(現・会議室)の持ち送り:戦前のRC造はハンチが大きいが、この建築は特に目立つ。関東大震災の直後の建設であったせいだろう。これを逆手にとって斜行面や三角形という異物を意匠的に巧みに活かしている
6——ライトアップされた正面全景:千変万化の細部に目を奪われて、あまり意識されないが、安井作品はどれもプロポーションが良い。彼がダイナミック・シンメトリー理論にいち早く注目する所以であろう

1

1

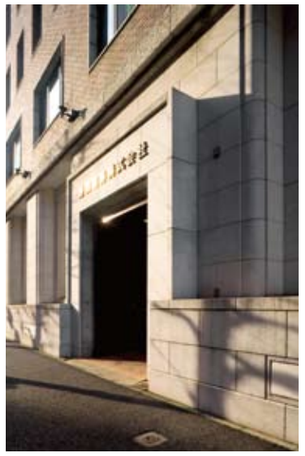
日本橋野村ビル

竣工年:1930年(旧館)

所在地:東京都中央区日本橋1-9-1 | 規模:地下2階、地上7階 | 構造:SRC造

2

3



4

1——西面全景:日本橋川に沿って長く伸びる。その姿は船舶を連想させる。安井武雄自身も、頂部の立面構成は艦橋を意識していたのではなかろうか。当初は各階の窓下端の位置で水平に刳り型が巡っていたが、戦後平滑な壁に変わった。1階まわりの開口も改修されている

2——1階階段室:直線が支配的になったこの建築の中で、曲面が現れる数少ない個所。石材と金属の手すりは改修されている

3——南面外観:1954年に、この写真の右側(東側)に新館の増築が企画され、最晩年の安井武雄が基本設計をまとめた。後継者である佐野正一が設計を引き継いで1959年に完成させた[撮影:1991年]

4——南側出入り口:枠には、当初、刳り型の多いコーニスが付き、また上部には欄間状の窓が開いていた

大阪ガスビル

竣工年:1933年(旧館)

所在地:大阪府大阪市中央区平野町4-1-2
規模:地下3階、地上8階｜構造:SRC造
国登録有形文化財

2

外壁リニューアル テクニカルレポート

1933年竣工の大阪ガスビルは、1-2階が黒御影の石張り、3階から上が白色の磁器モザイクタイル張りというシックな建物である。今では御堂筋を彩る戦前の近代建築の代表的な存在として、愛され親しまれている。

2005年から2006年にかけて外壁の全面的なリニューアル工事を実施したが、計画にあたっては、完全に落下を防止する視点から他の材料に変更する案も検討された。しかし大阪ガスの「御堂筋のシンボルとして親しまれてきた建物のイメージを守り、継承していきたい。あくまでも本物で…」との強い要望もあり、当時のタイルを再現させることとなった。

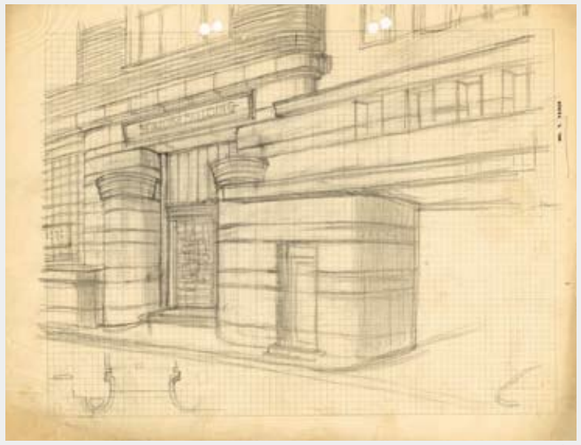
タイルは竣工当時の色合い・質感の再現を目指し、選定に努めた。また張り替えにあたっては、大林組提案の"インターネット工法"を採用し、立体織布とアンカーピンを用いて下地モルタルと躯体の接合強度を大きくし、躯体と下地モルタル層間の剥落防止をねらった。また、既存タイルのはつり工事の際は、昼間はビルに就業者がいることから夜間工事となり、騒音・振動対策に注意を払った。

リニューアル工事が無事完成し、改めて御堂筋からガスビルを見ると、白いタイルと黒御影の外観はよりコントラストが鮮やかになったように思う。「竣工時の斬新な姿は、さぞ浪花児の話題になったことであろう」と改めて思うところである。

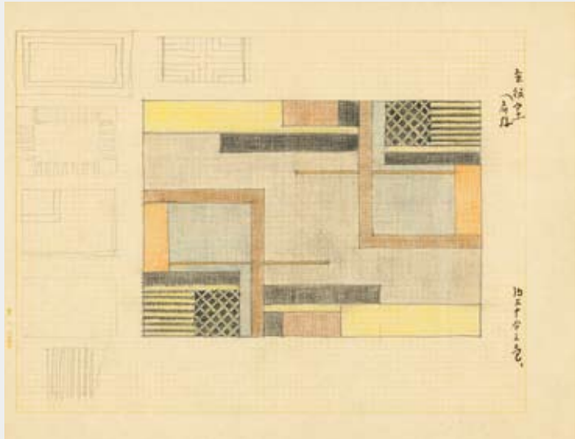
［安井建築設計事務所大阪事務所/清水修平］

1——東南面全景:南側の平野町通りは東西方向の主要幹線であり、新しい中軸線である御堂筋側との交差点という位置はまさに大阪の中心といえた。1966年に佐野正一によって北側に増築されて、当初から目標とされていたワンブロック・ワンビルディングの理想が実現した。佐野の増築は本館に沿いつつ、現代的な感覚も表した実に巧みなもの

2——外壁ディテール:一見したところ、建築家の計算は目につかないが、柱型の曲面、軒裏に張りつめられたタイル、袖壁・垂れ壁の寸法、入り隅の納め方、軒先の磁器タイルの刳り型などの一つひとつに細心の注意が払われている

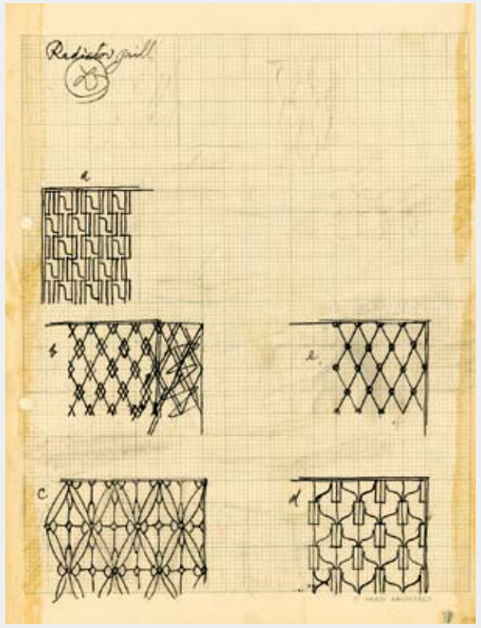


1



2

3



4

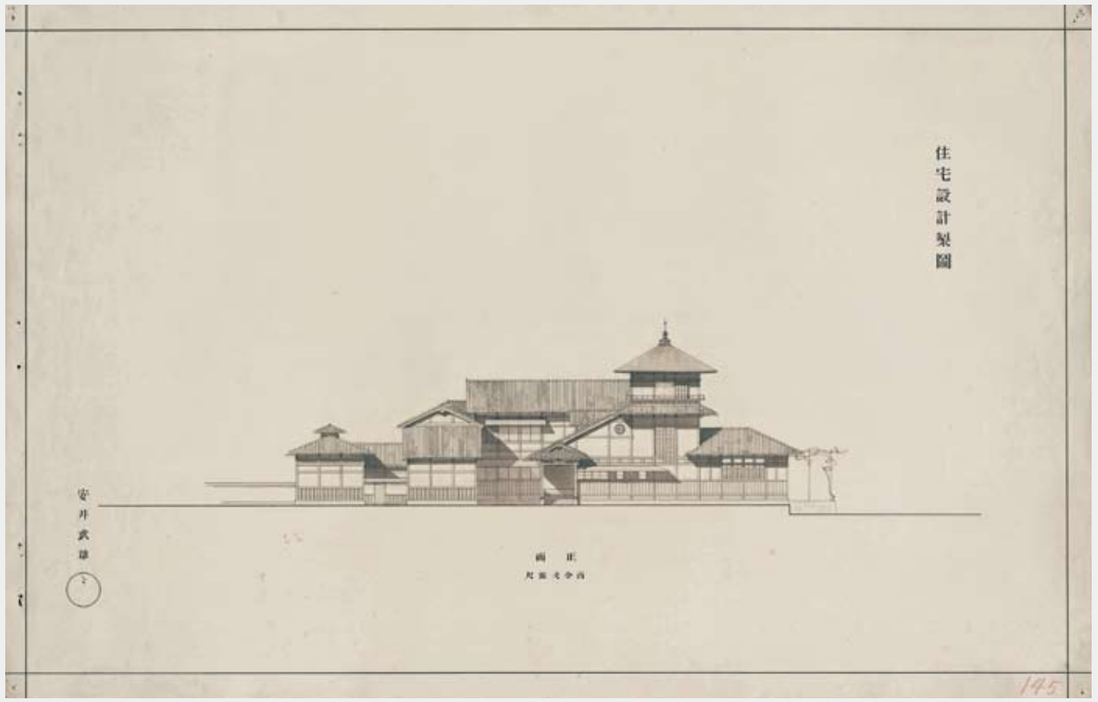
安井武雄のスケッチが語るもの

満州や米国での実務経験を通じて豊富なデザイン手法を身に染み込ませた安井武雄。エントランスを斜めから描いたスケッチ[1]は多様なエレメントを密実に組み合わせており、本領発揮の観がある。デ・スティルを感じさせる造作を試み、新しい方向性を模索しているスケッチも興味深いものがある[2]。一方で「大阪ガスビル」の場合、乾坤一擲(けんこういってき)の勝負に出た印象を抱く。初期のスケッチは、武者震いをするかのようだ。ここでは今までにないシャープな造型を生み出したい、そのために技術的にどこまで可能なのか、いや無理はすべきではないのかも、といった思考実験を行っている[3]。

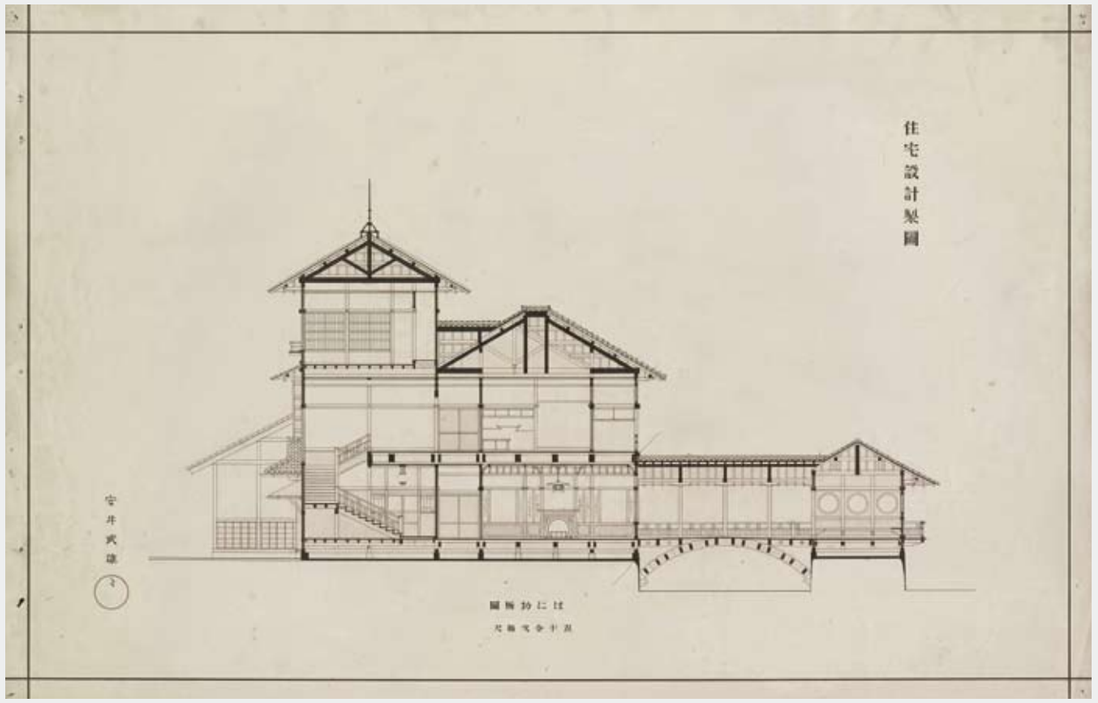
それとは異なる空気が宿るのが、グリルのスケッチである。ここで取り組んでいる多様なパターンからは、型染めのような繊細な感覚が伝わる。日本的な意匠の追求を試みたのだろうか。そこには誰も踏み入れることのできない愉悦の境地が感じられる[4]。

ところで、これらのスケッチ群にはあいまいな筆の動きがないことが共通している。描いた目的とは、作品を確実ならしめるためのものと措定できよう。自らの方法について多くを語らなかった安井だが、確実に手順を押さえるプロセスが作品一つひとつを能弁にしたのだ。

［安井建築設計事務所代表取締役社長／佐野吉彦］



5



6

1——日本橋野村ビル 玄関まわりスケッチ※｜2——野村銀行本店 重役応接室カーペット模様図案※｜3——大阪ガスビル 立面スケッチ※｜4——野村元五郎邸 窓グリルスケッチ※

5——卒業設計「住宅設計製図」正面:スペイン瓦で葺かれた屋根、2層を貫く窓、目を凝らせばその奔放さが次々と見えてくる｜6——同はに切断図:円形のモチーフが窓、渡り廊下のアーチ、暖炉と繰り返され、アール・ヌーヴォー的な造形への関心が背後にあることを示唆する。2階屋根での谷樋の大胆さにも驚く[1910][所蔵:東京大学大学院工学系研究科建築学専攻]

略歴 | Biography

- 明治17年[1884]
  2月25日、千葉県佐倉に生まれる。父信胤は和歌山県出身の陸軍軍人。母勇は栃木県佐山作造の娘。四男一女の次男。陸軍大将児玉源太郎が名付け親と伝えられる
- 明治36年[1903]
  4月、豊橋中学から、第一高等学校入学。在学中、白馬会洋画研究所にて油絵を学ぶ
- 明治40年[1907]
  4月、東京帝国大学工科大学建築学科入学。2年次まで主席であったと伝えられる
- 明治43年[1910]
  3月、東京帝国大学卒業。4月、南満州鉄道株式会社入社、工務課に勤務。課長堀三之助、課員178名、最大の課であった
- 大正5年[1916]
  4月4日、山口県萩の井上仁郎・芳子の娘井上浄と結婚
- 大正8年[1919]
  夏ごろ、堀口捨己、山田守、滝沢真弓、中国見学旅行。途中、大連で安井武雄に会う。この年、波江悌夫(先に片岡建築事務所に入所)の強い勧誘に応じ満鉄を辞し帰国。大阪の片岡建築事務所に入る。11月、大阪毎日新聞社起工。この現場監理に携わる
- 大正9年[1920]
  10月11日、片岡建築事務所より派遣され渡米。ニューヨークのロックライズ・アンド・トンプソン事務所にて神戸川崎造船所総合病院(実施されず)設計に従事する
- 大正10年[1921]
  5月、帰国。この年、満鉄時代に知遇を受けた広瀬安太郎・池田貞夫(野村合名会社役員)らの推薦により野村銀行堂島支店の設計を大阪毎日新聞社の現場事務所にてなす。同時期に大阪毎日新聞社代理部も設計
- 大正11年[1922]
  このころ、片岡建築事務所分室(土佐堀川沿いの公衆浴場の2階)で野村銀行本店の設計を特に指名で担当する。7月、大阪倶楽部焼失(野口孫一、長谷部鋭吉設計、大正2年)、新会館の設計を指名で受け、片岡建築事務所在職のまま大阪倶楽部臨時建築事務所を組織主宰する
- 大正13年[1924]
  4月、片岡建築事務所を辞し大阪信濃橋日清生命館の一室に安井武雄建築事務所を開設。この年、帝国人造絹糸株式会社の建築関係顧問となり同社工場設計に関与(昭和11年ごろまで)
- 大正14年[1925]
  早稲田大学講師を委嘱される(昭和10年まで)
- 大正15年[1926]
  東京事務所を千代田区丸ノ内の三菱仲14号館に開設。日本建築協会都市計画委員
- 昭和3年[1928]
  事務所を自ら設計した大阪市東区の高麗橋野村ビル6階に移転
- 昭和4年[1929]
  5月、大阪ガス株式会社会長片岡直方と大阪ガスビルの設計・監理の契約
- 昭和7年[1932]
  10月、日本建築協会教化委員長。この年、大美野田園都市住宅博覧会(日本建築協会創立15周年記念事業として開催)副委員長および展覧会部副委員長。この年より南満州鉄道株式会社東京支社の設計を始める
- 昭和8年[1933]
  京都帝国大学講師を委嘱される(昭和21年まで)
- 昭和11年[1936]
  日本建築協会副会長就任
- 昭和12年[1937]
  このころより野村銀行の支店を多数設計
- 昭和13年[1938]
  戦前において事務所が本格的な鉄骨および鉄筋コンクリート造の建物を設計した最後の年となる
- 昭和14年[1939]
  政府の貯蓄増進の方針に添った木造小規模銀行を数店設計
- 昭和15年[1940]
  7月15日、『安井武雄作品譜』城南書院刊、戦前の作品を集成
- 昭和16年[1941]
  戦争激化し、いよいよ建築家本来の設計依頼は少なくなる。鬱々とした日々を終日撞球で過ごしたという
- 昭和18年[1943]
  野村殖産貿易株式会社顧問に就任
- 昭和20年[1945]
  8月15日、敗戦。直前、事務所のあった高麗橋野村ビルを海軍に接収され、事務所を野村ビルに移す。自邸を進駐軍に接収される。12月、財閥解体により設立された野村建設工業の社長就任。もっぱら木造建築を設計・施工
- 昭和21年[1946]
  12月21日、野村建設工業社長辞任。安井建設株式会社を設立、大阪市東区本町に事務所を構える
- 昭和22年[1947]
  このころより昭和25年ごろまではほとんど小規模木造建築のみ
- 昭和23年[1948]
  大阪市東区安土町2丁目に事務所を新築
- 昭和26年[1951]
  1月、株式会社安井建築設計事務所として組織変更、施行部門は独立し藤井建設として発足
- 昭和28年[1953]
  4月、東京事務所を丸ノ内に再開。春、自邸接収解除
- 昭和29年[1954]
  5月、石原産業四日市工場視察の帰途発病、病床に伏す
- 昭和30年[1955]
  4月、佐野正一入社。日本建築協会名誉会員に推挙される。5月23日、逝去。5月27日、大阪今橋カトリック教会にて葬儀

主な作品 | Works | +印は南満州鉄道株式会社時代の作品 | ○印は片岡建築事務所時代の作品 | ●印は日本に現存

- 明治44年[1911]
  大連税関長官舎+(大連)
- 大正3年[1914]
  安東記念物産館+(安東) | 京都大礼記念博覧会満州館+(京都) | 大連西公園音楽堂+(大連)
- 大正4年[1915]
  南満州鉄道用度課倉庫+(大連) | 南満州鉄道中央試験所+(大連)
- 大正8年[1919]
  このころ、大連浜町用度事務所(用度課倉庫の改築か)+(大連)
- 大正11年[1922]
  野村銀行堂島支店○(大阪) | 大阪毎日新聞社代理部○(大阪)
- 大正13年[1924]
  野村銀行本店○(大阪) | 大阪倶楽部(大阪倶楽部臨時建築事務所)(大阪)●
- 大正14年[1925]
  佐々木駒之助邸(兵庫)
- 大正15年[1926]
  汎愛尋常小学校(大阪) | 野村銀行京都支店(京都) | 野村證券本社第1期工事(大阪) | 大阪毎日新聞社主催大阪記念博覧会満蒙出品館(大阪) | 大森邸(大阪)
- 昭和2年[1927]
  帝人岩国工場(山口) | 野村銀行鶴橋支店(大阪) | 高麗橋野村ビル(大阪)●
- 昭和3年[1928]
  野村銀行阿倍野橋支店(大阪) | 南満州鉄道株式会社大阪出張所(満鉄鮮満案内所)(大阪)
- 昭和4年[1929]
  山口銀行堺支店(大阪) | 関川貞雄邸(兵庫) | 野村銀行福岡支店(福岡) | 須賀商会本店(大阪)
- 昭和5年[1930]
  日本橋野村ビル(東京)● | 糸永丈吉邸(大阪) | 熊本石造邸(兵庫)
- 昭和6年[1931]
  野村證券名古屋支店(愛知) | 山口銀行名古屋支店(愛知) | 安井武雄自邸(兵庫)
- 昭和7年[1932]
  水口邸(京都) | 鈴木三栄ビル(味の素ビル)(東京) | 野村銀行梅田支店(大阪) | 野村證券豊中宿舎(大阪)
- 昭和8年[1933]
  大阪ガスビル(大阪)● | 旧山口吉郎兵衛邸(現・滴翠美術館)(兵庫)● | 野村證券本社増築(大阪) | 山口銀行久留米支店(福岡) | 中国合同電気本社(岡山)
- 昭和9年[1934]
  帝人三原工場第1期(広島) | 徳大寺則麿邸(兵庫) | 片岡音吾邸増築(大阪) | 横田邸(兵庫)
- 昭和10年[1935]
  第2野村ビル(旧・白木屋ビル)改装(大阪) | 東邦人繊徳島工場第1期工事(徳島) | 東邦人繊徳島工場研究所第1期(徳島) | 第二帝人三原工場第2期(広島) | 野村元五郎邸(兵庫)
- 昭和11年[1936]
  東邦人繊徳島工場女子寄宿舎(徳島) | 東邦人繊工場付属建物(徳島) | 南満州鉄道株式会社東京支社(東京) | 松島準吉邸増築(兵庫) | 鳴尾ゴルフクラブ猪名川コースクラブハウス(兵庫)
- 昭和12年[1937]
  京都野村生命ビル(京都) | 東邦人繊徳島工場女子寄宿舎増築・男子寮(徳島) | 安井富士別荘(山梨) | 須賀商会東京支店(東京) | 野村銀行大宮支店(京都) | 太陽人繊(田村駒)玉島工場(岡山) | 帝人三原工場(広島) | 東邦人繊徳島工場第2期(徳島)
- 昭和13年[1938]
  野村銀行川口支店(大阪) | 日本競馬会京都競馬場(京都) | 帝国繊維徳島工場(徳島) | 野村銀行片町支店(大阪) | 中央繊維玉島工場(岡山) | 広瀬安太郎邸(大阪)
- 昭和14年[1939]
  帝人第2麻里布工場(山口) | 野村銀行品川支店(東京)・歌島橋支店(大阪)・荻の茶屋支店(大阪)・錦糸町支店(東京) | 大阪ガスビル地下1階改造(大阪)
- 昭和15年[1940]
  南満州鉄道東京支社増築(東京) | 野村銀行三河島支店(東京)・船場支店(大阪) | 富士電機製造川崎工場(神奈川)・三重工場(三重)
- 昭和16年[1941]
  海軍施設部航空本部の各種施設を委託設計 | 富士電機製造豊田工場(東京)
- 昭和17年[1942]
  富士電機製造吹上工場(埼玉)
- 昭和18年[1943]
  富士電機製造四日市工場(三重) | 野村鉱業イトムカ鉱業所(北海道) | 日東航空機掛川工場(静岡)
- 昭和21年[1946]
  須賀工業神戸支店(兵庫)
- 昭和22年[1947]
  野村證券和歌山支店(和歌山) | 東邦レーヨン徳島工場製品倉庫(徳島) | 日本交通公社天王寺営業所(大阪)・神戸簡易宿泊所(兵庫) | 文運堂大阪支店(大阪) | 西村商店大阪支店(大阪) | 大和商事倉庫(大阪)
- 昭和23年[1948]
  機械靴懇和会事務所(大阪) | 東邦化工大阪事務所(大阪) | 山大実業大阪事務所(大阪) | 安井建築設計事務所社屋(大阪) | 帝国繊維徳島工場倉庫(徳島)
- 昭和24年[1949]
  日本交通公社京都駅前営業所(京都) | 縫糸会館(久宝館)(大阪) | 日興物産大阪支店(大阪) | 日本食堂大阪駅構内売店(大阪) | 日本食堂奈良営業所(奈良) | 野村證券大阪支店増築(大阪)
- 昭和25年[1950]
  垣内貿易大阪支店(大阪) | 東邦レーヨン徳島総合グランド・管理職員社宅(徳島) | 羽白商事本社(大阪) | 東邦レーヨン徳島工場倶楽部増築(徳島) | 大同商事大阪支店(大阪) | 大阪ガス泉尾出張所(大阪) | カトリックダイゼスト東京支社(東京)
- 昭和26年[1951]
  吉善社屋(大阪) | 帝国製麻磐田工場(静岡) | 東邦レーヨン浜寺社宅(大阪) | 国鉄赤穂線坂越駅(兵庫) | 東邦レーヨン大阪事務所(大阪) | エビス土地建物本社(大阪) | 東邦レーヨン徳島工場社宅・食堂・労働会館ほか(徳島)
- 昭和27年[1952]
  東邦レーヨン大垣工場(岐阜) | 大和紡績本社(大阪) | 日本化学繊維検査協会本館・中央検査所(大阪) | 大和紡績福井工場増築(福井) | 帝国製麻大阪支店改装(大阪) | 野村證券岐阜営業所(岐阜) | 杉村倉庫上佐堀倉庫(大阪) | 多聞酒造福岡支店・瓶詰工場(福岡) | オール商会ゴッドフレー邸・モンセン邸・プラント邸(兵庫) | 須賀工業名古屋支店(愛知) | 関東衣料店舗(大阪)
- 昭和28年[1953]
  兵庫相互銀行本店(兵庫) | 日綿実業本社ビル(大阪) | 兵庫相互銀行西脇支店(兵庫) | 日本郵船神戸支店改装 | 大和紡績金沢工場増改築(石川) | 山陽百貨店(兵庫) | 野村證券岡山支店(岡山)・小倉支店(福岡)・静岡支店(静岡)・渋谷支店(東京)・福岡支店(福岡)・本社改装(大阪) | 石原産業那智妙法鉱業所(和歌山) | 須賀工業東京支店(東京) | 神戸銀行西野田支店(大阪) | 杉村倉庫神戸港第三突堤倉庫(兵庫) | 東邦レーヨン徳島工場社宅(徳島) | 実業の日本社改装(東京)
- 昭和29年[1954]
  東邦レーヨン徳島研究所・工場・増築・社員アパート(徳島) | 安井武雄自邸(兵庫) | 落綿会館(大阪) | 野村證券上野支店(東京)・神戸支店(兵庫)・広島支店(広島)・浜松支店(静岡) | 石原産業四日市チタン工場・塩浜共同住宅(三重) | 商工中金大阪支店(大阪) | 原田邸(京都) | 富士電機製造三重工場小型電動機工場(三重) | 野村證券久ヶ原明生寮(東京)
- 昭和30年[1955]
  野村證券高松支店(香川) | 大和紡織金沢工場織布工場(石川) | 東邦レーヨン徳島工場研究所・実験所(徳島) | 日本専売公社京都工場西大路アパート(京都) | 神戸町立神戸小学校(兵庫)

取材協力:アーバネックス/社団法人大阪倶楽部/東京大学大学院工学系研究科建築学専攻/野村ファシリティーズ/安井建築設計事務所
参考資料:『自由様式への道—建築家安井武雄伝』山口廣著[南洋堂/1984]
その他:※印の写真および図版は、安井建築設計事務所提供/特記のない写真は撮り下ろしです | 次号予告:「INAX REPORT No.183」の「続・生き続ける建築」は渡辺仁です